

査読論文

多重WH前置と派生の同時性について

On Multiple WH-Fronting and the Simultaneity in Derivation

佐藤 英志*

SATO Hideshi

This article explores a possible extension of the Parallel Derivation hypothesis proposed in Hiraiwa (2005, 2010) and Chomsky (2004, 2008) to the explanation of Superiority effects in multiple *wh*-fronting languages such as Bulgarian and Serbo-Croatian. Investigations into previous analyses will provide us with a clue to understand the structure and derivation of multiple *wh*-fronting constructions in these languages, which sheds new light on the characteristics of cyclic structure-building operations and Superiority effects. Some interesting phenomena concerning Sluicing constructions, *Wh*-Island effects, and free word-order of multiply fronted *wh*-phrases are also investigated.

Key words: Superiority, Agree Closest, Parallel Derivation, Operator Freezing, Focus-Movement

1 はじめに

WH移動に課される制約のひとつに優位性条件がある。例えば(1)に例示するように、目的語WH句は主語WH句を飛び越えて移動できない。

- (1) a. Who₁ t₁ saw what₂?
b. *What₂ did who₁ see t₂?

生成文法研究の歴史において、優位性条件を一般原理から演繹して導く試み

* 新潟県立大学国際地域学部 (hidesato@unii.ac.jp)

がなされてきた。極小主義(MP)の枠組みでは、最小連結条件(MLC)、最短距離の誘引(Attract Closest: AC)、最短距離の一致 (Agree Closest: AgrC)が仮定されてきた¹。本稿ではProbe-Goal(PG)システム(Chomsky 2000, 2001)に立脚し、AgrCによる説明を推し進める。AgrCの定義を(2)に示す。

- (2) Matching holds of a probe P and a goal G if
 a. D(P) is the c-command domain of a probe P, and
 b. matching feature of a goal G, is closest to P if there is no G' in D(P) matching P such that G is in D(G')
 (Chomsky 2000: 122)

例えば、(1a,b)の対比は概略以下のように説明される。(3)は(1a,b)に共通する時点の派生を表したものである。

- (3) [_{CP} C_Q [_{TP} who T [_{VP} see what]]]

ここで、(2)に従いCの解釈不可能素性[Q]は主語WH句*who*—目的語WH句*what*をc統御している—と適合し一致する。従って、(1a)は認可されるが、(1b)はAgrCの違反として排除される。

このような優位性条件の原理的説明に関して、本稿で扱うブルガリア語(Bg)とセルボ・クロアチア語(SC)は極めて興味深い問題を提起する。これらの言語は多重WH前置(MWF)の特徴を示し、すべてのWH句が文頭に生起する。(4)はBgの例である。

- (4) a. Koj₁ kogo₂ t₁ e vidjal t₂
 who whom is seen
 ‘Who saw whom?’
 b. *Kogo₂ koj₁ t₁ e vidjal t₂
 whom who is seen
 (Bošković 1998: 51)

一般にBgのMWFは優位性条件に従うとされている。一例としてRichards (1997, 1998, 2001)による分析を示す。(5)は(4a)の派生を図示したものである。

- (5) [_{CP} Koj₁ kogo₂ C [_{TP} t₁ e [_{VP} vidjal t₂]]]
-

(5)において、Cは最短距離にある主語の*koj₁*—目的語の*kogo₂*をc統御している—をACに従い誘引する²。従って*koj₁*が外側のCP指定部に移動し、その後

*kogo*₂が内側のCP指定部に潜り込む。これに対して(4b)では*kogo*₂が*koj*₁より先に誘引される必要があり、これはACに抵触するため排除される。従って(4b)は非文法的になると説明される。

これに対してSCのMWFは優位性条件に関して極めて特異的な振る舞いを示す。(6)で例示するように優位性効果が生じない場合もあれば、(7)に例示するように優位性効果が生じる場合もある³。

- (6) a. *Ko*₁ *šta*₂ *t*₁ *kupuje t*₂?
 who what buys
 ‘Who on earth buys what?’
 b. *Šta*₂ *ko*₁ *t*₁ *kupuje t*₂?
 what who buys (Bošković 2008:258)
- (7) a. *Ko*₁ *li šta*₂ *t*₁ *kupuje t*₂?
 who C what buys
 ‘Who on earth buys what?’
 b. **Šta*₂ *li ko*₁ *t*₁ *kupuje t*₂?
 what C who buys (Bošković 1998: 54)

本稿の主たる目的は、BgとSCのMWFの構造と派生を考察し、(4)と(6)-(7)のような優位性条件の事実、およびそれに関わる事象をPGシステムに立脚して原理的に説明することである。具体的には、Hiraiwa (2005, 2010)、Chomsky (2004, 2008)が提唱する平行的派生の仮説(8)を採用することでこの目的が達成されることを主張し、この仮説に経験的・理論的支持を与える。

(8) Parallel Derivation Hypothesis (PDH)

Every operation applies simultaneously at a phase level. (Hiraiwa 2010: 144)

本稿の構成は以下の通りである。第2節ではMWFの構造と派生および優位性条件について論じた先行研究の概要をまとめ、論点を明らかにする。第3節ではPDHを導入し、(4)と(6)-(7)の説明に取り組む。第4節ではこの提案の経験的・理論的帰結を論じ、それに裏づけを与える。最後に第5節で本稿を結ぶ。

2 先行研究とその問題点

本節では、考察の出発点として3つの仮説—仮説Ⅰ(Bošković 1997, 1998, 1999, 2000, 2002)、仮説Ⅱ(Richards 1997, 1998, 2001)、仮説Ⅲ(Bošković 2003, 2008)—の概要と問題点を整理する。なお、これらの仮説(およびそれらを構成する論考)は理論的背景が異なるため基盤とする原理も異なる。本稿ではこれらの仮説を可能な限りPGシステムに再解釈した上で議論を進めていく。

2-1 仮説Ⅰの概要

仮説Ⅰの主張は(9)-(11)に示す通りである。

- (9) Cの顕在的併合はBgでは義務的だがSCでは随意的である⁴。
- (10) 焦点要素は焦点主要部の指定部で認可される。
- (11) BgではCが、SCではFが焦点主要部として機能する。

はじめに(6)を考察する。(6)ではCが顕在的に併合されていない。従って、ここでのWH前置はC_Qとの一致ではなく、WH句の焦点認可による移動である⁵。(6a,b)の派生を(12a,b)に図示する。

- (12) a. [FP WH₁ [FP WH₂ F [TP t₁... t₂...]]]
- b. [FP WH₂ [FP WH₁ F [TP t₁... t₂...]]]

このような焦点移動にはPGシステムが関与しないと仮定すれば、WH₁とWH₂の移動はAgrCに従う必要がなく、語順は自由であると説明される。

次に(4)を考察する。BgではCの顕在的併合が義務的である。従って、C_Qとの一致が関与する。(4a,b)の派生を(13a,b)にそれぞれ図示する。

- (13) a. [CP WH₁ [CP WH₂ C_Q [TP ... t₁... t₂...]]]
- b. *[CP WH₂ [CP WH₁ C_Q [TP ... t₁... t₂...]]]

(13a)において、AgrCに従いWH₁がC_Qと一致して外側のCP指定部に移動し、続いてWH₂が焦点認可のため内側のCP指定部に移動する。これに対して(13b)ではWH₂が外側のCP指定部に移動しており、この派生はAgrCに抵触するため排除される。このように(6a,b)の文法性と(4a,b)の対比が説明される。

2-2 仮説Ⅰの問題点

このような説明に対し、(7)が問題となる。(7)ではCが顕在的に併合されているが、この場合でもWH句の焦点は認可される必要がある。従って(7a,b)も(14a,b)に図示するようなF指定部への焦点移動が適用されるはずである。

(14) a. [_{FP} WH₁ [_{FP} WH₂ F [_{TP} t₁... t₂...]]]

b. [_{FP} WH₂ [_{FP} WH₁ F [_{TP} t₁... t₂...]]]

この段階では(12a,b)と同様にAgrC違反はない。次に(14a,b)を起点として、Cの併合とCP指定部への顕在的WH移動が適用されれば、(15a,b)のようになる。

(15) a. [_{CP} \uparrow C_Q [_{FP} WH₁ [_{FP} WH₂ F [_{TP} ... t₁... t₂...]]]]]

b. [_{CP} \uparrow C_Q [_{FP} WH₂ [_{FP} WH₁ F [_{TP} ... t₁... t₂...]]]]]

(15a)ではWH₁が、(15b)ではWH₂がそれぞれAgrCを満たしてCP指定部に移動できる。従って、(15a,b)ともに合法的となり、(7a,b)の両方が文法的であると誤って予測することになる。

2-3 仮説Ⅱの概要

仮説Ⅱの主張を(16)に示す。

(16) a. IP吸着言語 (例えばSC) は、WH句がCP指定部にひとつだけ生起し、その他のWH句はすべてIPに付加される。

b. CP吸着言語 (例えばBg) は、すべてのWH句がCP指定部に生起する。

はじめに(6)を考察する。SCはIP吸着言語であることから、(6a,b)の派生は(17a,b)の段階を踏むことが可能である。

(17) a. [_{IP} WH₁ [_{IP} WH₂ [_{IP} ... t₁... t₂...]]]

b. [_{IP} WH₂ [_{IP} WH₁ [_{IP} ... t₁... t₂...]]]

ここでWH句のIP付加は一種のスクランピングであり、日本語のスクランピング(18)が自由語順を示すことと平行的である。

- (18) a. [_{IP} Hanako-ni₁ [_{IP} tegami-o₂ [_{IP} Taroo-ga t₁ t₂ okutta]]].
 Hanako-DAT letter-ACC Taro-NOM sent
 ‘Taro sent a letter to Hanako.’
 b. [_{IP} Tegami-o₂ [_{IP} Hanako-ni₁ [_{IP} Taroo-ga t₁ t₂ okutta]]].
 letter-ACC Hanako-DAT Taro-NOM sent

次に(17)から(19)へと派生が移行する。

- (19) a. [_{CP} WH₁ C_Q [_{IP} t₁' [_{IP} WH₂ [_{IP}... t₁... t₂...]]]]]
 b. [_{CP} WH₂ C_Q [_{IP} t₂' [_{IP} WH₁ [_{IP}... t₁... t₂...]]]]]

(19a)ではWH₁が、(19b)ではWH₂がそれぞれAgrCを遵守してCP指定部にWH移動している。従って(19a,b)は等しく合法的であり、(6a,b)の文法性が正しく説明される。

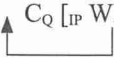
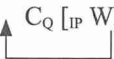
次に(4)を考察する。BgはCP吸着言語であり、(4a,b)の派生はそれぞれ(20a,b)のように表される。

- (20) a. [_{CP} WH₁ [_{CP} WH₂ C_Q [_{TP} ... t₁... t₂...]]]
 b. * [_{CP} WH₂ [_{CP} WH₁ C_Q [_{TP} ... t₁... t₂...]]]

(20a)ではWH₁が外側のCP指定部に移動し、その後WH₂が内側のCP指定部に潜り込んでいる。この派生はAgrCを遵守するため合法的である。これに対して(20b)ではWH₂が外側のCP指定部に移動しており、これはAgrCに違反している。従って(20b)の派生は排除され、(4b)の非文法性が説明される。

2-4 仮説Ⅱの問題点

このような説明に対し、やはり(7)が問題となる。仮説Ⅱによれば、SCはIP吸着言語であり、WH句のIP付加を原理的には排除できない。従って(7a,b)は(21a,b)のように派生される可能性がある。

- (21) a. [_{CP} C_Q [_{IP} WH₁ [_{IP} WH₂ [_{IP} ... t₁... t₂...]]]]]

 b. [_{CP} C_Q [_{IP} WH₂ [_{IP} WH₁ [_{IP} ... t₁... t₂...]]]]]


(21a)のWH₁と(21b)のWH₂はそれぞれAgrCを満たしてCP指定部に移動可能である。従って(21a,b)は両方とも合法的となり、結果的に(7a,b)が等しく文法的

であると誤って予測してしまう。なお、この問題を回避するにはIP付加を禁じる以外になく、仮説Ⅱの吸着システムが根底から覆えてしまう。

2-5 仮説Ⅲの概要

仮説Ⅲは(22)と(23)を提案することで仮説Ⅰの修正を試みている。

(22) Operator Freezing (OF)⁶:

Operators in operator-variable chains cannot undergo further operator movement.
(Bošković 2008: 250)

(23) SCがCの顕在的併合を伴う場合は、Cが焦点主要部として機能する。

ここで重要なのは仮説Ⅰの問題点とされていた(15a,b)がOFにより排除されることである。(15a,b)を(24a,b)として再録する。

(24) a. $[_{CP} \uparrow C_Q [_{FP} WH_1 [_{FP} WH_2 F [_{TP} \dots t_1 \dots t_2 \dots]]]]]$

b. $[_{CP} \uparrow C_Q [_{FP} WH_2 [_{FP} WH_1 F [_{TP} \dots t_1 \dots t_2 \dots]]]]]$

(24a,b)が示すように、WH₁とWH₂のFP指定部への移動—演算子移動と仮定—に加えて（同じく演算子移動である）WH移動を重複して適用できない。この帰結としてCの顕在的併合は焦点主要部Fと共起できなくなる。従って(23)の仮定から、(7a,b)の構造は(25a,b)のように表される。

(25) a. $[_{CP} WH_1 [_{CP} WH_2 C_Q [_{TP} \dots t_1 \dots t_2 \dots]]]]]$

b. $*[_{CP} WH_2 [_{CP} WH_1 C_Q [_{TP} \dots t_1 \dots t_2 \dots]]]]]$

(25a,b)はBgの(13a,b)と同じ構造と派生である。従って(13a,b)と同じ理由から(7a,b)の対比が説明される。

2-6 仮説Ⅲの問題点

仮説Ⅲには以下に述べるような問題点がある。仮説Ⅲは焦点移動が演算子移動である—従って(24a,b)がOFで排除される—と仮定している。しかしこの仮定には問題がある。もし焦点移動が演算子移動ならば、A'移動の特徴を示すはずである。そのような特徴のひとつに、(26)に例示する弱交差(WCO)がある。

- (26) a. Who₁ t₁ loves his₁ mother?
 b. *Who₁ does his₁ mother love t₁?

ところが、SCのWH前置(27)にはWCOが観察されない。

- (27) a. Tko₁ t₁ voli svoju₁ majku?
 who loves his-ACC mother-ACC
 ‘Who loves his mother?’
 b. Koga₁ voli njegov₁ majka t₁
 who loves his-NOM mother-NOM
 ‘Who does his mother love?’ (Richards 2001: 20)

これはBgのWH前置(28)にWCOが観察されるのとは対称的である。

- (28) a. Koj₁ t₁ običa majka si₁?
 who loves mother his
 ‘Who loves his mother?’
 b. *Kogo₁ običa majka su₁ t₁?
 who loves mother his
 ‘Who does his mother love?’ (Richards 2001: 17)

これは(27)におけるWH前置—つまり焦点移動—がA移動であることを示唆している。従って(24a,b)では焦点移動(A移動)に続きWH移動(A’移動)が適用されており、もはやOFで排除することはできない。結果的に(24a,b)ともに合法的となるため、(7a,b)の両方が文法的であると誤って予測してしまう。

さらにこの議論が妥当であるならば、Cの顕在的併合と焦点主要部Fは原理的に共起可能であり、(23)の提案は余剰的である。

2-7 問題点の整理

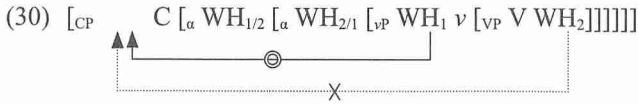
ここまでの分析から、(29)に一般化される問題点が明らかになった。

- (29) a. [CP ↑ C_Q... [... [αWH₁ [αWH₂ [... t₁... t₂...]]]]]
 b. [CP ↑ C_Q... [... [αWH₂ [αWH₁ [... t₁... t₂...]]]]]

(29a,b)に図示した通りSCではWH句がα (=TP/FP)の指定部を経由する派生が可

能である。この位置を踏み台としてWH移動すれば、AgrCを遵守してCP指定部に移動できる。しかしこれでは(29b)が排除できなくなってしまう。

筆者はこの問題解決の糸口はPDHにあると考える。PDHではフェイズレベルでの操作がすべて同時に行われる。とりわけC (Probe)が元位置のWH句を直接GoalとすることでAgrCを満たすGoalはWH₁のみとなる。



以下、このようなPDHに基づく説明を具体的に見ていく。

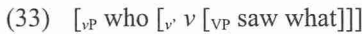
3 平行的派生の仮説とその適用

3-1 PDHと優位性条件

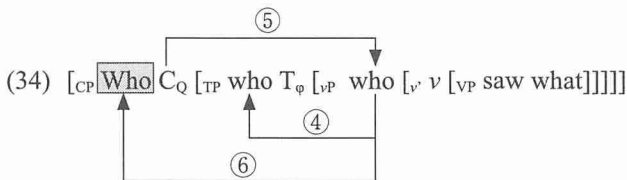
本稿はChomsky (2004 et seq.)に従い(31)と(32)を仮定する。

- (31) a. すべての操作はフェイズ主要部により駆動する。
 b. フェイズ主要部はCとvである。
 (32) Cから機能範疇Tにφ素性が継承される。

本稿ではこれらの仮定から以下のように優位性条件が説明されると主張する。(1a)の'Who saw what?'を例にとろう。(33)はvPフェイズまで派生が進行したことを表しており、主語whoが基底でvP指定部に生起している。



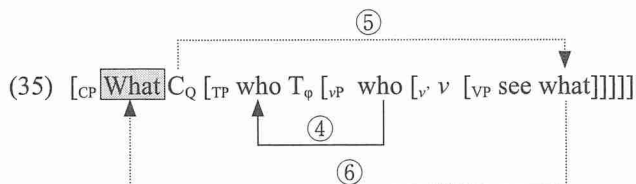
(33)に続いてCPフェイズでは(34)の構造が形成される。



(34)ではPDHに従い、CPフェイズレベルで以下の①から⑥の行程が同時に適用されている：①CとTの併合、②CからTへのφ素性の継承、③T_φとwho[NOM]の一致、④whoのTP指定部へのA移動、⑤C_Qとwho[WH]の一致、⑥whoのCP指定部へのA'移動。なお、whoの連鎖は最上位のコピーがPFで具現

すると仮定する。従ってここではCP指定部のコピーがPFで具現する⁷。この派生で重要なのは⑤の行程がAgrCを遵守して*who*の元位置(*v*P指定部)のコピーをGoalとしていることである。

これに対して(1b)の‘*What did *who* see?’の派生は以下のように表される⁸。



①から④までは(34)と同じ行程だが、⑤と⑥が*what*をGoalとしている点異なる。そして⑤と⑥はAgrCに抵触するためこの派生は排除される⁹。このように(1b)の非文法性が説明されることになる。

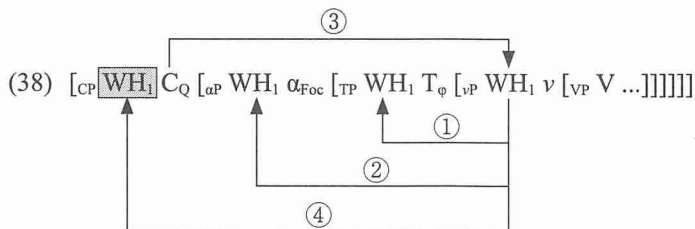
3 - 2 提案

本稿では以下の2点を提案する。

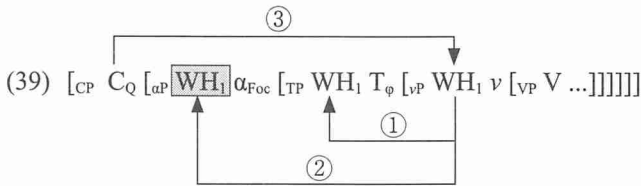
(36) Cから機能範疇 α に焦点素性(Foc)が継承される。

(37) 音韻的に空のC_Qにはエッジ素性がない。

これらに従い、(38)-(39)に示す2通りの派生がなされる¹⁰。(WH句は内在的焦点を有すると仮定する。) (38)はC_Qが音韻的に具現している場合である。



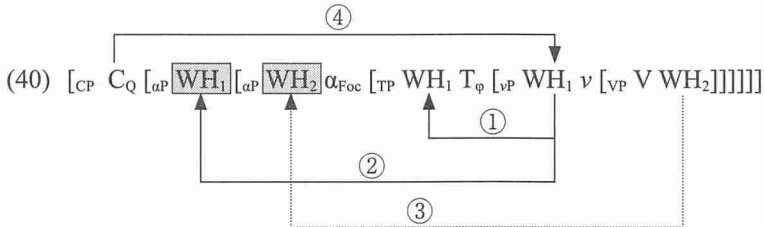
(38)において、 α がFocをTが ϕ をそれぞれCから継承している。さらに以下の行程が同時進行している：①WH₁のTP指定部へのA移動、②WH₁の α P指定部への焦点移動、③C_QとWH₁の一致、④WH₁のCP指定部への移動。ここで①と②の行程がありながらも、WH₁は最上位のCP指定部位置で具現することになる。次に(39)はC_Qが音韻的に空の場合である。



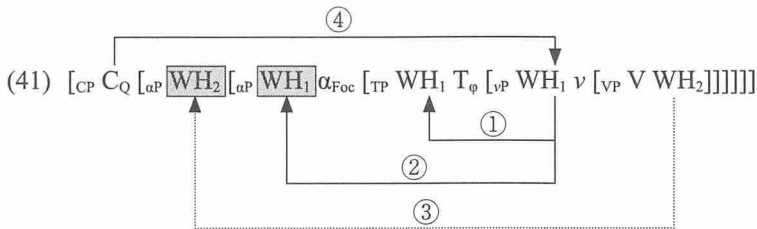
ここでも①から③の行程がCPフェイズ内で同時進行している。ここではWH₁のCP指定部への移動がない点が(38)と異なる。結果的にWH₁のコピーは最上位のαP指定部で具現することになる。

3-3 説明

では最初に(6)と(7)の対比を説明してみよう。(6a)の派生を(40)に示す。



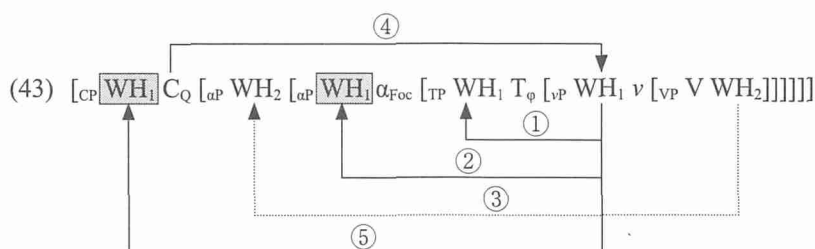
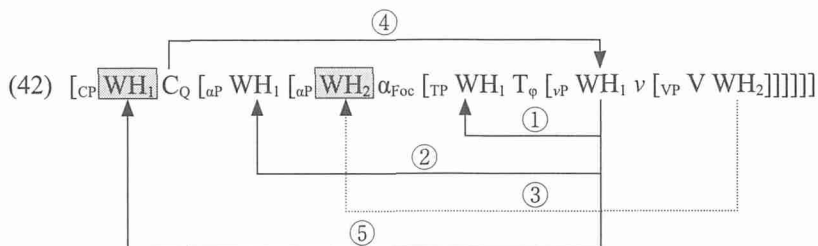
ここで以下の操作が同時進行している：①WH₁のTP指定部への移動、②WH₁のαP指定部への焦点移動、③WH₂のαP指定部への焦点移動、④C_QとWH₁の一致。またここではC_Qが音韻的に空であるため、WH₁のCP指定部への移動がない。なお②と③の焦点移動にはPGシステムが関与しないと仮定する¹¹。従ってもう一つのオプションとして(41)の派生が可能である。



これが(6b)の派生であり、(40)と(41)はWH₁とWH₂の位置だけが異なる。(40)と(41)ともに④の行程はAgrCを満たしている。また両者ともにαP指定部にあるWH₁とWH₂が最上位のコピーとしてPFで具現している。このように(6a,b)の事実が説明される。

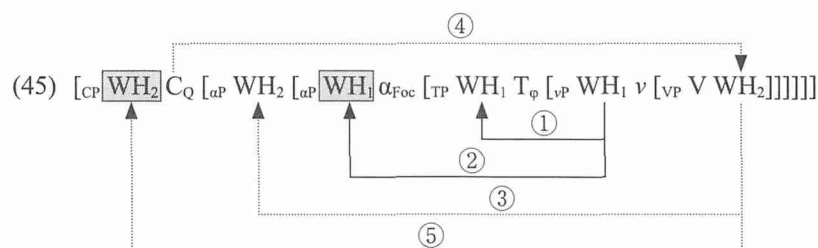
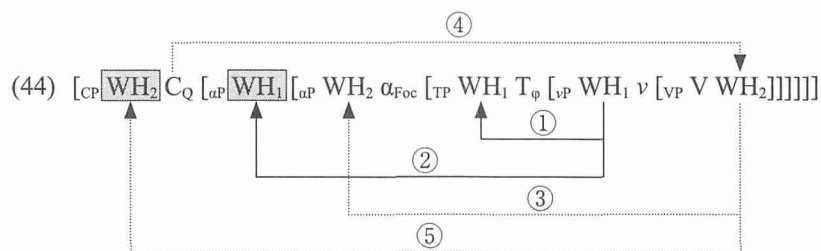
次に(7a,b)の対比を説明してみよう。はじめに(7a)の派生を以下に示す。(7a)

はWH₁とWH₂のαP指定部における位置関係から(42)と(43)の2通りの派生の可能性がある。



(42)-(43)において①から④の行程は(40)-(41)と同一である。ここではC_Qが音韻的に具現しているので、⑤のWH移動が(同時進行で)加わっている点異なる。④の一致はC_QとWH₁の間にあることからAgrCを満たしている。WH₁はCP指定部で具現し、WH₂はαP指定部で具現することになる。このように(7a)の事実が説明される。

つぎに(7b)の説明に移る。(7b)の派生にも(44), (45)の2通りの可能性がある。



(44)と(45)はWH₁とWH₂の位置関係のみが異なる。また(44),(45)では(42),(43)と異なりC_QがWH₂を一致のGoalとしている。この関係はAgrCに抵触することから、(44),(45)ともに排除される。結果的に(7b)の非文法性が説明されることになる。さらにBgの例(4a,b)についても、Bgは常にC_Qが音韻的に具現することから、(7a,b)と同様に一つまり(42)-(43)と(44)-(45)の対比として一説明されることになる¹²。

3-4 この分析の利点

この分析の利点として、BgとSCのMWF構造の簡素化がある。仮説Ⅰ・Ⅱ・ⅢのMWF構造に関する記述は(46)-(47)のように要約される。

(46) WH前置に関してBgとSC間に媒介変数的な差異がある。BgではすべてのWH句がCP指定部に生起する。SCではWH句がCP指定部に生起しないか(仮説Ⅰ)、あるいは生起してもひとつだけである(仮説Ⅱ)。しかしCが顕在的に併合される時は全てのWH句がCP指定部に生起する(仮説Ⅲ)。

(47) 焦点構造に関してBgとSC間に媒介変数的な差異がある。Bgの焦点主要部はCである。これに対してSCの焦点主要部はFである(仮説Ⅰ)。しかしCが顕在的に併合される時はCが焦点主要部を兼ねる(仮説Ⅲ)。

このように従来の仮説ではMWF構造に関して、BgとSC間の媒介変数的差異と随意性を仮定せざるを得なかった。これに対して、本稿の分析ではこのような仮定は不要であり、SCとBgのMWFには以下の普遍的な単一構造があるのみである。

(48) [CP (WH₁) C_Q [_{αP} WH_{1/2} [_{αP} WH_{2/1} α_{Foc} [_{TP} WH₁ T_φ [_{VP} WH₁ v [_{VP} V WH₂]]]]]]]

BgとSCともにCP指定部に生起できるのはWH₁のみである。またBgとSCともに焦点主要部はαのみが仮定されている。つまり、MWF構造に関してBgとSC間に媒介変数的な差異も随意性もない。表層的相違はC_Qの音韻特性に還元されることになる。

4 経験的・理論的帰結

前節ではPDHを仮定することで(4)と(6)-(7)の事実が説明できることを論じ

た。本稿の分析は、さらに以下に述べるような経験的・理論的帰結を導く。

4-1 Sluicing構文

Stjepanović (2003)、Boeckx and Lasnik (2006)はSCのSluicing構文における優位性効果(49)を観察している。

- (49) A: Neko je nekad ovdje sakrio blago.
 somebody is somewhere here hidden treasure
 ‘Somebody hid the treasure here at some point in the past.’
 B: Ko kad?/ B’: *Kad ko?
 who when when who
 Stjepanović (2003: 268)

Stjepanović (2003)は(49B-B’)の事実を説明するためには、2つのWH句がCP指定部に生起する必要があると論じ、(50a,b)の構造を支持している。

- (50) a. ... [_{CP} ko₁ [_{CP} kad₂ C [_{TP} ... t₄ ... t₂ ...]]]]
 b. ... * [_{CP} kad₂ [_{CP} ko₁ C [_{TP} ... t₄ ... t₂ ...]]]]

本稿は、(前節で論じたように)この構造を仮定しない。しかしMerchant (2001)に従いSluicingがTP削除であると仮定すれば、(49B-B’)の事実は本稿の分析でも矛盾なく説明できる。(49B-B’)の構造をそれぞれ(51)と(52)に示す。

- (51) a. (...V) [_{CP} ko₁ C_Q [_{αP} ko₁ [_{αP} kad₂ α [_{TP} ... t₄ ... t₂ ...]]]]]]
 b. (...V) [_{CP} ko₁ C_Q [_{αP} kad₂ [_{αP} ko₁ α [_{TP} ... t₄ ... t₂ ...]]]]]]
 (52) a. *(...V) [_{CP} kad₂ C_Q [_{αP} ko₁ [_{αP} kad₂ α [_{TP} ... t₄ ... t₂ ...]]]]]]
 b. *(...V) [_{CP} kad₂ C_Q [_{αP} kad₂ [_{αP} ko₁ α [_{TP} ... t₄ ... t₂ ...]]]]]]

(51)-(52)に図示する通り、CPの多重指定部は不要である。(51)ではko₁がCP指定部で、kad₂がαP指定部で具現している。また(52)はkad₂の移動がAgrCに違反しているので(52a,b)ともに派生が破綻する。従って(49B’)は排除される。このようにしてSCのSluicing構文に関する事実が説明される。

4-2 WH島の制約

本稿の分析はRudin (1988)によるMWF言語の分析とは矛盾する。Rudinは以下のようなWH島制約に関するBg(53)とSC(54)の対比を観察している。

- (53) ?*Koja ot tezi knigi₁ se čudiš koj znae koj prodava t₁?*
 which of these books refl.wonder-2s who knows who sells
 ‘Which of these books do you wonder who know who sells?’

(Rudin 1988: 457)

- (54) **Šta₁ si me pitao ko može da uradi t₁?*
 what have-2s me asked who can to do
 ‘What did you ask me who can do?’

(ibid.: 459)

Rudinによればこの対比は両言語の句構造の違いを反映している。概略、BgはCPの多重指定部を許すため、(55)に図示するように空のCP指定部を脱出口としてWH島制約の違反を回避できる。

- (55) [_{CP} WH₁ ... [_{TP} ... [_{CP} WH₂ [_{CP} [_{TP} ... t₁ ...]]]]]
-

これに対してSCはCPの多重指定部を許さない。従って脱出口として利用できるCP指定部がなく、WH島制約に違反する。

- (56) * [_{CP} WH₁ ... [_{TP} ... [_{CP} WH₂ ... [_{TP} ... t₁ ...]]]]]
-

本稿の分析ではBgとSCの両者にCPの多重指定部を仮定しない。従って両言語ともWH島制約に従うことが予測される。この予測は(53)の事実とは一見矛盾するが、より詳細な事実が本稿の分析を支持する。Bošković (2003, 2008)によれば、BgにおいてWH島からのWH抽出が許されるのはWH句がD連結の場合(53)と関係節化が関与する場合(57)に限られる。

- (57) *Vidjah edna knjiga, kojato se čudja koj znae koj prodava t.*
 saw-1s a book which refl. wonder-1s who knows who sells
 ‘I saw a book which I wonder who knows who sells.’ (Rudin 1988: 457)

これに対してWH句が非D連結の場合(58)、WH句が付加詞の場合(59)、介在するWH要素がD連結の場合(60)にはWH島からのWH抽出は許されない。

- (58) **Kakvo₁ se čudiš koj znae koj prodava t₁?*
 What refl. wonder-2s who knows who sells
 ‘What do you wonder who knows who sells?’

(Bošković 2008: 260)

- (59) **Zašto/ poradi_i kakva pričina znae dali Boris e zaminal t₁?*
 why for which reason knows whether Boris is left
 ‘Why/ for which reason does he know whether Boris left?’ (ibid.)
- (60) ?**Koja ot tezi knjigi_i se čudiš koj čovek znae koj učitel*
 which of these books refl. wonder-2s which man knows which teacher
 prodava t₁?
 sells
 ‘Which of these books do you wonder which man knows which teacher sells?’
 (ibid.)

これらの事実はBgもWH島制約に従うことを示唆しており、本稿の分析の妥当性を支持している¹³。

本稿では(58)-(60)の非文法性をBošković (2003, 2008)とは異なる方法で説明する。Bošković (2003, 2008)はCPが多重指定部をもつ構造(61)を仮定している。

- (61) [CP WH₂ [CP WH₁ C_{Q, Foc} [TP ... t₁... t₂...]]]

ここでCPの指定部は(62)に示す通りOFに抵触するため脱出口にならない。

- (62) [CP \uparrow C [TP ... [CP WH₂ [CP WH₁ C [TP ... t₁... t₂...]]]]]
-

しかし第2節で論じたとおり本稿ではOFを仮定しない。本稿では（前節で論じた）単一構造(63)を仮定する。

- (63) [CP \uparrow C [TP ... [CP WH₂ C [αP WH₁ α [TP ... t₁... t₂...]]]]]
-

この構造では唯一のCP指定部がWH₂により占められているため脱出口がない。従ってWH₁の移動は欠如要素介在性制約(64)から排除される。

- (64) Defective Intervention Constraint:

*α > β > γ, where (a) “>” indicates c-command, and (b) β and γ match the probe α, but β is inactive so that the effects of matching are blocked.

(adapted from Chomsky 2000: 123)

結果的にWH島の制約の観点からもOFの余剰性が示されたことになる。

4-3 最小遵守の原理

本稿の分析はRichards (1997, 1998, 2001)による最小遵守の原理(Principle of Minimal Compliance: PMC)と潜り込み操作(tucking-in)を不要とする。仮説 I・II・IIIでは暗黙のうちにこれらを仮定していた。(4a)を(65)として再録し、仮説 I・II・IIIが仮定する派生を(66)に示す。

- (65) Koj₁ kogo₂ t₁ e vidjal t₂
 who whom is seen
 ‘Who saw whom?’
- (66) [_{CP} Koj₁ kogo₂ C [_{TP} t₁ e [_{VP} vidjal t₂]]]
-

Richards (1997, 1998, 2001)によれば、(66)では koi_1 が sAC を遵守してCP指定部へ移動した時点でPMCに従い AC が無効化され、以降の派生に AC が関与しなくなる。従ってこれに続く派生で $kogo_2$ が sMLC を遵守してCP指定部へ潜り込むことになる¹⁴。

しかし本稿の分析ではPMCも潜り込み操作も不要である。前節で論じた通り(65)の構造は(67a,b)のいずれかである。

- (67) a. [_{CP} [koi_1] C [_{αP} Koj₁ [_{αP} [$kogo_2$] α [_{TP} ... [_{VP} t₁... t₂...]]]]]]]
 b. [_{CP} [koi_1] C [_{αP} [$kogo_2$] [_{αP} Koj₁ α [_{TP} ... [_{VP} t₁... t₂...]]]]]]]

いずれの派生においもAgrCを遵守してCP指定部へ移動するのは主語の koi_1 であり、 $kogo_2$ の移動先はCPとは独立した範疇 $αP$ の指定部である。また $αP$ 指定部への koi_1 と $kogo_2$ の焦点移動は、前節での議論から語順が自由であり、かつ同時に適用されている。従ってこの派生においてAgrCの無効化という概念も潜り込みという操作も関与しない。

またPMCは(68)に示す事実も説明すると仮定されてきた。

- (68) a. Koj₁ kogo₂ kakvo₃ t₁ e pital t₂ t₃?
 who whom what is asked
 ‘Who asked whom what?’
 b. Koj₁ kakvo₃ kogo₂ t₁ e pital t₂ t₃?
 who whom what is asked (Bošković 1995: 13-14)

Richardsの言葉を借りれば、(69)に示すように koj_1 がACを満たしてCP指定部へ移動した時点で、PMCによってACが無効化されるため $kogo_2$ と $kakvo_3$ の語順は自由である。

- (69) a. $[_{CP} koj_1 [_{CP} kogo_2 [_{CP} kakvo_3 C [_{TP} \dots t_1 \dots t_2 \dots t_3 \dots]]]]$
 b. $[_{CP} koj_1 [_{CP} kakvo_3 [_{CP} kogo_2 C [_{TP} \dots t_1 \dots t_2 \dots t_3 \dots]]]]$

しかし、この事実はPMCを仮定する必要なく、本稿の仮説から自然に説明される。(68)の構造と派生を(70)に示す。(68)では3つのWH句— koj_1 , $kogo_2$, $kakvo_3$ —が関与しているため、その派生は厳密には以下の6通りである。

- (70) a. $[_{CP} \boxed{koj_1} C_Q [_{\alpha P} koj_1 [_{\alpha P} \boxed{kogo_2} [_{\alpha P} \boxed{kakvo_3} \alpha_{Foc} [_{TP} t_1 \dots t_2 \dots t_3]]]]]]$
 b. $[_{CP} \boxed{koj_1} C_Q [_{\alpha P} koj_1 [_{\alpha P} \boxed{kakvo_3} [_{\alpha P} \boxed{kogo_2} \alpha_{Foc} [_{TP} t_1 \dots t_2 \dots t_3]]]]]]$
 c. $[_{CP} \boxed{koj_1} C_Q [_{\alpha P} \boxed{kogo_2} [_{\alpha P} koj_1 [_{\alpha P} \boxed{kakvo_3} \alpha_{Foc} [_{TP} t_1 \dots t_2 \dots t_3]]]]]]$
 d. $[_{CP} \boxed{koj_1} C_Q [_{\alpha P} \boxed{kogo_2} [_{\alpha P} \boxed{kakvo_3} [_{\alpha P} koj_1 \alpha_{Foc} [_{TP} t_1 \dots t_2 \dots t_3]]]]]]$
 e. $[_{CP} \boxed{koj_1} C_Q [_{\alpha P} \boxed{kakvo_3} [_{\alpha P} koj_1 [_{\alpha P} \boxed{kogo_2} \alpha_{Foc} [_{TP} t_1 \dots t_2 \dots t_3]]]]]]$
 f. $[_{CP} \boxed{koj_1} C_Q [_{\alpha P} \boxed{kakvo_3} [_{\alpha P} \boxed{kogo_2} [_{\alpha P} koj_1 \alpha_{Foc} [_{TP} t_1 \dots t_2 \dots t_3]]]]]]$

ここでは3つのWH句（のコピー）が全て αP 指定部に置かれており、本来これらのコピーはすべて語順が自由である。しかし koj_1 は常にCP指定部で具現するが、 $kogo_2$ と $kakvo_3$ は αP 指定部で具現している。結果的に $kogo_2$ と $kakvo_3$ の語順のみが自由になり、(68a,b)に反映している。なお前節での議論に従えば、BgとSCは単一の構造を持つことから、SCにも同様の事実があることが予測される。(71)の事実はこの予測が正しいことを示しており、ここでの分析の妥当性を支持している。

- (71) a. Ima ko kako kome da pomogne.
 has who how whom PRT. helps
 ‘There is someone who can somehow help somebody.’
 b. Ima ko kome kako da pomogne.
 has who how whom PRT. helps
 ‘There is someone who can somehow help somebody.’ (Bošković 2003: 36)

5 結語

以上、本稿では以下のことを論じてきた。(i) BgとSCの優位性条件に関する事実がPDHを採用することでPGシステムから説明できる。(ii) BgとSCのMWFは単一な構造で表され、両者の相違はC₀の音韻特性に還元される。(iii) SCのSluicing構文やWH島制約に関する事実が本稿の仮説から説明できる。(iv) OFやPMCなどの余剰的な制約を破棄することが可能である。

謝 辞

本稿の執筆にあたり、多くの方々から貴重な助言をいただいた。特に匿名の査読者の方からは本稿の草稿に対して多くの有益な示唆をいただいた。この場をお借りして、心から感謝の意を申し上げたい。なお言うまでもなく本稿における不備の責任は全て筆者に帰するものである。

注

- 1 MLCとACの定義はChomsky (1993)とChomsky (1995)を参照のこと。
- 2 ここではRichards (1997, 1998, 2001)を引用する意図からACに言及する。
- 3 SCに優位性条件が関与する環境には、(7)の他に埋込疑問節(i)と長距離WH移動(ii)がある。(i)-(ii)の事実も基本的には第3節で論じる方法で説明されると考える。
 - (i) a. Ko koga voli, taj o njemu i govori.
 who whom loves that-one about him and talks
 'Everyone talks about the person they love.'
 b. *Koga ko voli, taj o njemu i govori.
 whom who loves that-one about him and talks (Bošković 1998: 54)
 - (ii) a. Ko si koga tvrdio da je istukao?
 who are whom claimed that is beaten
 'Who did you claim beat whom?'
 b. *Koga si ko tvrdio da je istukao?
 whom are who claimed that is beaten (ibid.)
- 4 Bošković (2000)は、この仮定がCの音韻素性の有無と派生の循環性から原理的に導かれると論じている。概略、SCではCの音韻素性が随意的だが、BgはCが音韻的接辞であると仮定する。詳細はBošković (2000)を参照。
- 5 WH句の内在的焦点に関してはStjepanović (1999)を参照のこと。
- 6 Bošković (2003, 2008)はOFが活性化条件(i)から導かれる定理であると論じている。
 - (i) The Activation Condition:
 Goal as well as probe must be active for Agree to apply. (Chomsky 2001: 6)
- 7 以下PFで具現するWHコピーを網掛けして表わす。
- 8 以下の議論では主語WH句(WH₁)と目的語WH句(WH₂)に関する操作をそれぞれ実線と点線で表す。
- 9 この説明には重要な問題が含まれている。フェイズ不可侵条件(i)と格素性照合の観点から、目的語WH句はvPフェイズのエッジになければならない。
 - (i) In a phase α with head H, the domain of H is not accessible to operations outside α ,

only H and its edge are accessible to such operations.

(Chomsky 2000: 108)

(ii) [_{CP} What C_Q [_{TP} who T_φ [_{VP} what [_{vP} who [_{v'P} [_{VP} see what]]]]]]]

PDHが正しければ、C_QはAgrCに従い*what*をGoalとすることになり、(ii)が許されてしまう。これは明らかに事実と反する。これを理由にChomsky (2008)はWH移動をPGシステムから除外し、英語の優位性条件が懐疑的であるとの分析を提示している。本稿ではこの分析は採用せず、英語の優位性条件が真性であり、かつPGシステムの守備範囲にあるとの立場を採る。筆者は(ii)の問題点はEpstein, Kitahara and Seely (2012)で論じられている反循環的併合とvPの内部構造の関連性から説明可能との見通しを得ているが、これについては稿を改めて論じることにはしたい。

10 以下の議論では、本筋に関わる統語操作にのみ言及する。

11 類似した分析についてはMiyagawa (2010)を参照のこと。

12 このようなSCとBgの構造的平行性は以下の挿入句の事実から支持される。(i)はBgの例で、(ii)-(iii)はSCの例である。また(i)-(ii)はWH移動が関与しており、(iii)は焦点移動のみが関与している。

(i) ?*Koj, spored tebe, kakvo e kazal?

who according-to you what has said

'Who, according to you, said what?'

(Rudin 1988: 468)

(ii) *Ima ko, po tebi, šta da mu proda.

has who according-to you what part him sells

'There is someone who, according to you, can sell him something.'

(Bošković 2008: 264)

(iii) Ko, po tebi šta pije?

who according-to you what drinks

'Who, according to you, is drinking what?'

(Rudin 1988: 469)

(i)と(ii)は挿入句が許されない点で平行的であり、(iii)は挿入句が可能であることが(i)-(ii)と異なる。Rudin (1988)、Grewendorf (2001)等の分析とは異なり、筆者はこの対比がαPの付加構造に起因するとの見通しに立つが、詳細は今後の研究課題とする。

13 (53)と(57)におけるWH島制約違反の欠如については今後の課題とする。

14 PMCの定義はRichards (2001: 199)を参照のこと。

参考文献

- Boeckx, Cedric, and Howard Lasnik. 2006. Intervention and repair. *Linguistic Inquiry* 37: 150–155.
- Bošković, Željko. 1997. On certain violations of the Superiority Condition, AgrO, and economy of derivation, *Journal of Linguistics* 33: 227-254.
- Bošković, Željko. 1998. Multiple *wh*-fronting and economy of derivation, In *Proceedings of the 16th West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. by Emily Curtis, James Lyle, and Gabriel Webster, 49-63. Stanford, Calif.: CSLI Publications.
- Bošković, Željko. 1999. On multiple feature checking: Multiple *wh*-fronting and multiple head movement. In *Working minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 159-187. Cambridge. Mass.: MIT Press.
- Bošković, Željko. 2000. Sometimes in [Spec, CP], some times in situ. In *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 53-87. Cambridge. Mass.: MIT Press.
- Bošković, Željko. 2002. On multiple *wh*-fronting. *Linguistic Inquiry* 33: 351-383.
- Bošković, Željko. 2003. On *wh*-islands and obligatory *wh*-movement contexts in South Slavic. In *Multiple wh-fronting*, ed. by Cedric Boeckx and Kleantes K. Grohmann, 27-50. Amsterdam: John Benjamins.
- Bošković, Željko. 2008. On the operator freezing effect. *Natural Language and Linguistic Theory* 26: 249-287.
- Bošković, Željko. 2011. Rescue by PF deletion, traces as (non)interveners, and the that-trace effect. *Linguistic Inquiry* 42: 1-44.
- Chomsky, Noam. 1993. A minimalist program for linguistic theory. In *The view from Building 20*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries. In *Step by step: Essays on minimalism in honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In *Ken Hale: A life in language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2004. Beyond explanatory adequacy. Structures and beyond. In *The*

- cartography of syntactic structures*, Volume 3, ed. by Adriana Belletti, 104-131.
- Chomsky, Noam. 2005. Three factors in language design. *Linguistic inquiry* 36: 1-22.
- Chomsky, Noam. 2008. On phases. In *Foundational issues in linguistic theory*, ed. by Robert Freidin, Carlos Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166. Cambridge, MA: MIT Press.
- Epstein, Samuel David, Hisatsugu Kitahara and T. Daniel Seely. 2012. Structure building that can't be. In *Ways of structure building*, ed. by Myriam Uribe-Etxebarria and Vidal Valmala, 253-270, Oxford University Press.
- Grewendorf, Günter. 2001. Multiple *wh*-fronting. *Linguistic inquiry* 32: 87-122.
- Hiraiwa, Ken. 2005. *Dimensions of symmetry in syntax: Agreement and clausal architecture*. Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Hiraiwa, Ken. 2010. Scrambling to the Edge. *Syntax*, 13(2), 133-164.
- Merchant, Jason. 2001. *The syntax of silence*. Oxford University Press.
- Miyagawa, Shigeru. 2010. *Why agree? Why move? Unifying agreement-based and discourse-configurational languages*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Richards, Norvin. 1997. *What moves where when in which language*. Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Richards, Norvin. 1998. The principle of minimal compliance. *Linguistic Inquiry* 29(4), 599-629.
- Richards, Norvin. 2001. *Movement in language: Interactions and architectures*. Oxford University Press.
- Rudin, Catherin. 1988. On multiple questions and multiple *wh*-fronting. *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 445-501.
- Stjepanović, Sandra. 1999. What do second position cliticization, scrambling, and multiple *wh*-fronting have in common? Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Stjepanović, Sandra. 2003. Multiple *wh*-fronting in Serbo-Croatian matrix questions and the matrix sluicing construction. In *Multiple wh-fronting*, ed. by Cedric Boeckx and Kleantes K. Grohmann, 255-284. Amsterdam: John Benjamins.